

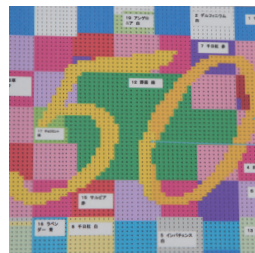
2017年流山 GREEN FESTIVAL 恒例の花絵 今年のテーマは「50のhope」



4000 鉢の花や野菜の苗は、色ごとにわけて、相番を振られている。



左：廣田准教授。右：現代社会学科土屋薫教授。二人の指示で作業は順調だ。



花絵の設計図。縦7×横7のピースに分け、真ん中に大きく50と描いた。



設計図を実物大の紙に写す。数字がどの花や苗を置くのかを示している。



およそ2時間の作業花絵が完成。

絵の設計図が完成したとき、すでに4月半ばになっていた。

花絵を設置する作業は、現代社会学科の学生12人が担当。地域住民の方々も参加し共同作業となった。まるで、巨大なジグソーパズルを完成させるような、気の遠くなる作業だ。花と野菜の苗をデザイン画にあわせて、ひとつひとつ並べていく。

流山市は今年で市制施行五十周年となった。それにちなんで、今年の花絵のテーマは「50のhope」。同フェスティバルでは、花や野菜の苗の種類はあらかじめ決まっている。それらの数を計算し、色のバランスをとり、近くからみても遠くからみてもテーマの「50」がわかりやすく、美しく映えるように、デザインや花の配置図を考案している。

花絵は縦7×横7、計49のピースに分けられ、それぞれのピースに置く同じ色の花が指定されている。フェスティバルに参加してもらっている「あなた」が最後の1ピースで、合計「50」となる、というコンセプトだ。市制50周年にこんなことになった。この花絵の設計図が完成

予想最高気温は21度にすぎなかったが、日差しが強い。4月29日土曜日、朝9時から江戸川大学の学生たちが、流山おおたかの森駅南口都市広場で開催される流山グリーンフェスティバルの会場に、4000 鉢の花と野菜の苗を並べて花絵の設置をはじめた。およそ2時間で完成した630cm 四方の花絵には大きく「50」の文字が浮かびあがった。(撮影：増田朱音 和田美菜海 取材・文：和田美菜海)

花絵を立ち止まり見る人たちは、みなそうって「きれい！」と声をあげる。年配の方は「五十周年か、もうそんなに経つのか」と感慨深い。子どもたちも花絵に興味津々だ。流山市を初めて訪れたという女性は「これが学生たちのデザイン？すごい新鮮！地元でもやってくれないかな」と驚いていた。